帝京長岡・開志国際・北越・新潟中央・新潟商業…高校バスケ特集

NIIGATA Sports Magazine

Standard

新潟スポーツマガジン スタンダード

新潟 NIIGATA

2021 Winter

冬 特大号

定価1,000円

ウインターカップ2021

NIIGATA is NO.1

新潟を制するものは全国を制す。

総勢2,347人選手名鑑

新潟の高校・中学バスケットボール

U18ウインターカップ県大会出場男女

119チーム

U15Jr.ウインターカップ県大会出場男女

36チーム

WINTER CUP 2021 開幕特集

NIIGATA is No.1

新潟を制するものは全国を制す。

24秒間の攻防戦。
24秒を制するものが試合を制す。
120を超すチームの頂上決戦。
新潟を勝ち抜いたものが、日本一に輝く。

若き力が躍動する新潟バスケットボール界。
本誌巻頭からはウインターカップ予選に臨む高校、
巻末からはJrウインターカップ予選に臨むU15クラブの特集をお送りします。

スタンダード新潟編集部

高校野球
PICK-UP★
NEW STAR

タフネス左腕

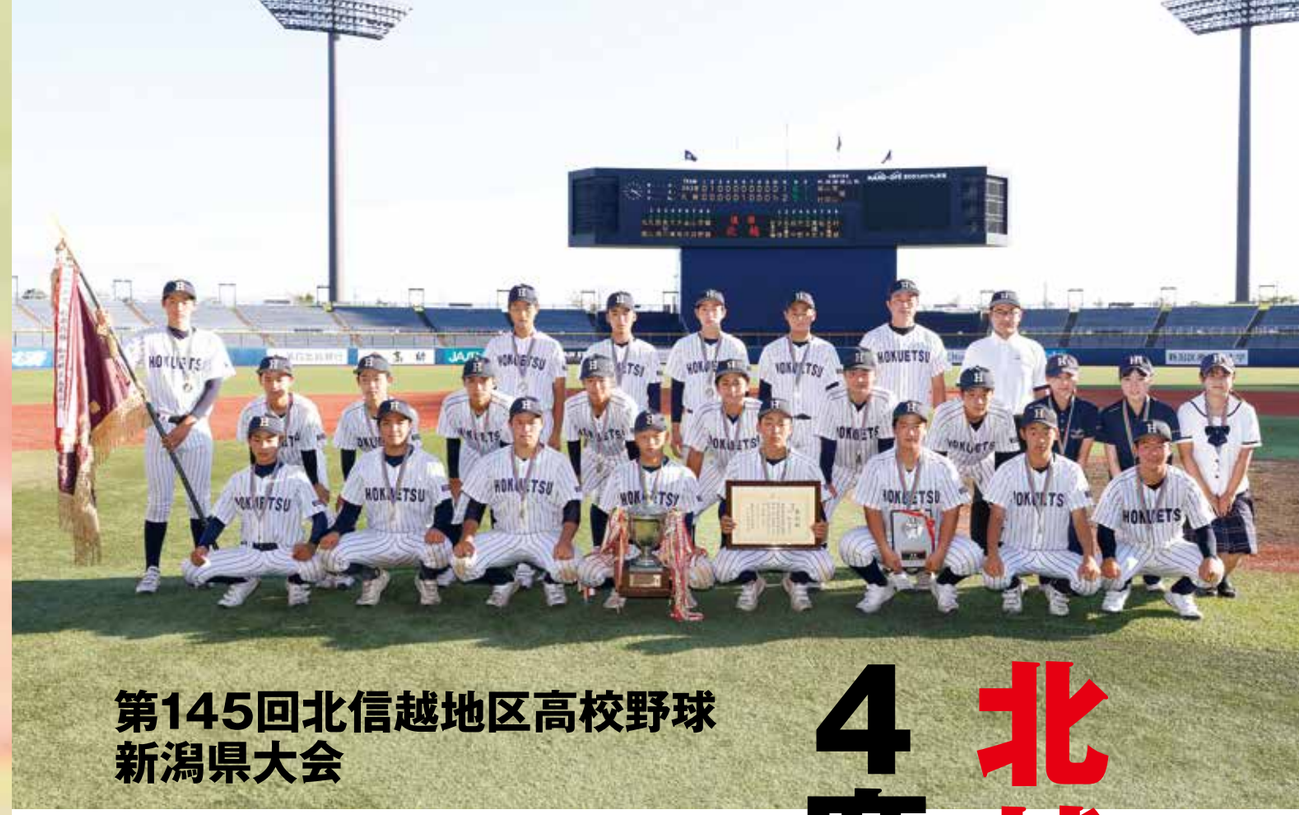
北越

ヤマクラ・ヒロム
山倉大武

投手　2年　左投げ／左打ち
180cm／68kg　岡方中出身

130キロ前後の直球にカーブ、スライダー、チェンジアップなどを織り交ぜコーナーを丁寧につく左腕。今秋県大会の新潟工業との初戦では8回2死まで無安打無得点の投球を披露。3回戦でも夏4強の開志学園相手に7回3失点と好投するなど、決勝進出、そして優勝の原動力となった。岡方中時代から1試合を1人で投げきる試合が多く、投手としての経験値は抱負。打者としても左右に打ち分ける非凡な打撃センスがある。

撮影◉嶋田健一（スタジオ嶋田）



第145回北信越地区高校野球 新潟県大会

北越、2年ぶり4度目の秋制覇

準々決勝で新潟明訓高校、準決勝で帝京長岡高校に打ち勝ってきた北越高校が、夏の覇者・日本文理高校に延長の末にサヨナラ勝ち。秋の王者に輝いた。

文◉編集部

第145回北信越地区高校野球新潟県大会の決勝が10月7日、新潟市のハードオフエコスタジアム新潟で行われ、北越高校が日本文理高校に延長10回、2－1でサヨナラ勝ちし、秋季は2年ぶり4度目の優勝を決めた。

息詰まる攻防に決着をつけたのは、北越の1番打者、遊撃手で主将の丸山幹太（2年）だった。1－1の10回裏1死満塁から中堅に犠牲フライ。三塁走者の山田直輝（1年）が生還した。北越はエース山倉大武（2年）と山田の両左腕の継投で強打の日本文理を封じた。打線は日本文理の背番号10、村越仁士克投手（2年）に9回まで3安打に抑えられながらも、最後に2安打を集めて決勝点を奪った。

北信越大会への第3代表決定戦は、帝京長岡高校のエース茨木秀俊（2年）が13奪三振の力投。東京学館新潟高校を2－0で完封した。秋は新チームによる戦い。今年も多くの新星が現れたが、編集部では特に異彩を放った18選手をピックアップした。

バスケットボール 中村華祈

Nakamura Kanon

【新潟アルビレックスBBラビッツ】

世界を驚かせた日本女子バスケ。「目標は日本代表。そして金メダル」

女子バスケットボール・Wリーグが10月に開幕。新潟アルビレックスBBラビッツのルーキーF中村華祈（かのん）はU19日本代表候補に選出されるなど、今季の注目株だ。将来の日本代表入り、そして五輪金メダル獲得を目標に、社会人1年目のシーズンをスタートさせた。

撮影・文◉斎藤慎一郎（日刊スポーツ新聞社）

profile 中村華祈（なかむら・かのん）◉2003年（平成15）年1月24日生まれ、北海道出身。前田北小3年でバスケを始める。前田北中から札幌山の手高校に進み、1年から試合出場。3年のウインターカップではベスト4に進出。19年にU16日本代表に選ばれた。ポジションはF。172cm、60kg。

ついつい口にしてしまう言葉がある。「私、すごく緊張するんです」。Wリーグ開幕前の9月に行われたオータムカップ。中村は1戦目の鶴屋百貨店戦、途中出場で19得点、2戦目の日立ハイテク戦はスタメンで12得点。どちらもチーム2番目の得点だった。ルーキーながらスコアメーカーとしてシーズンでの活躍に期待を抱かせた。

この時も「試合前は緊張していた」と言う。高校女子バスケの名門、北海道・札幌山の手高校を卒業し、ラビッツに入団。オータムカップが社会人初実戦だった。自分がどれだけやれるのか――。楽しみよりも不安が上回った。それもコートに立つまでの話。試合になれば、臆せず自分の強みを出した。スピードに乗ったドライブでリングを攻める。3点シュートを思い切り打つ。「通用する部分があることが分かった」。緊張、不安は試合後、自信に変わっていた。

今、自信を得るために立ちたい場がある。「目標は日本代表。そして五輪に出たい」。8月の東京五輪。女子バスケの日本代表は初の銀メダルを獲得した。メンバーには町田瑠唯、長岡萌映子、東藤なな子と、札幌山の手高校の先輩3人が名を連ねていた。

「すごくかっこよかった。先輩たちのおかげで五輪が身近な目標になった」。実際、中村も将来の代表候補に近い位置にいる。3月、5月、7月のU19日本代表候補合宿に参加した。最終的に代表には選ばれなかったが、身体能力の高さと攻撃センスは関係者から高く評価された。

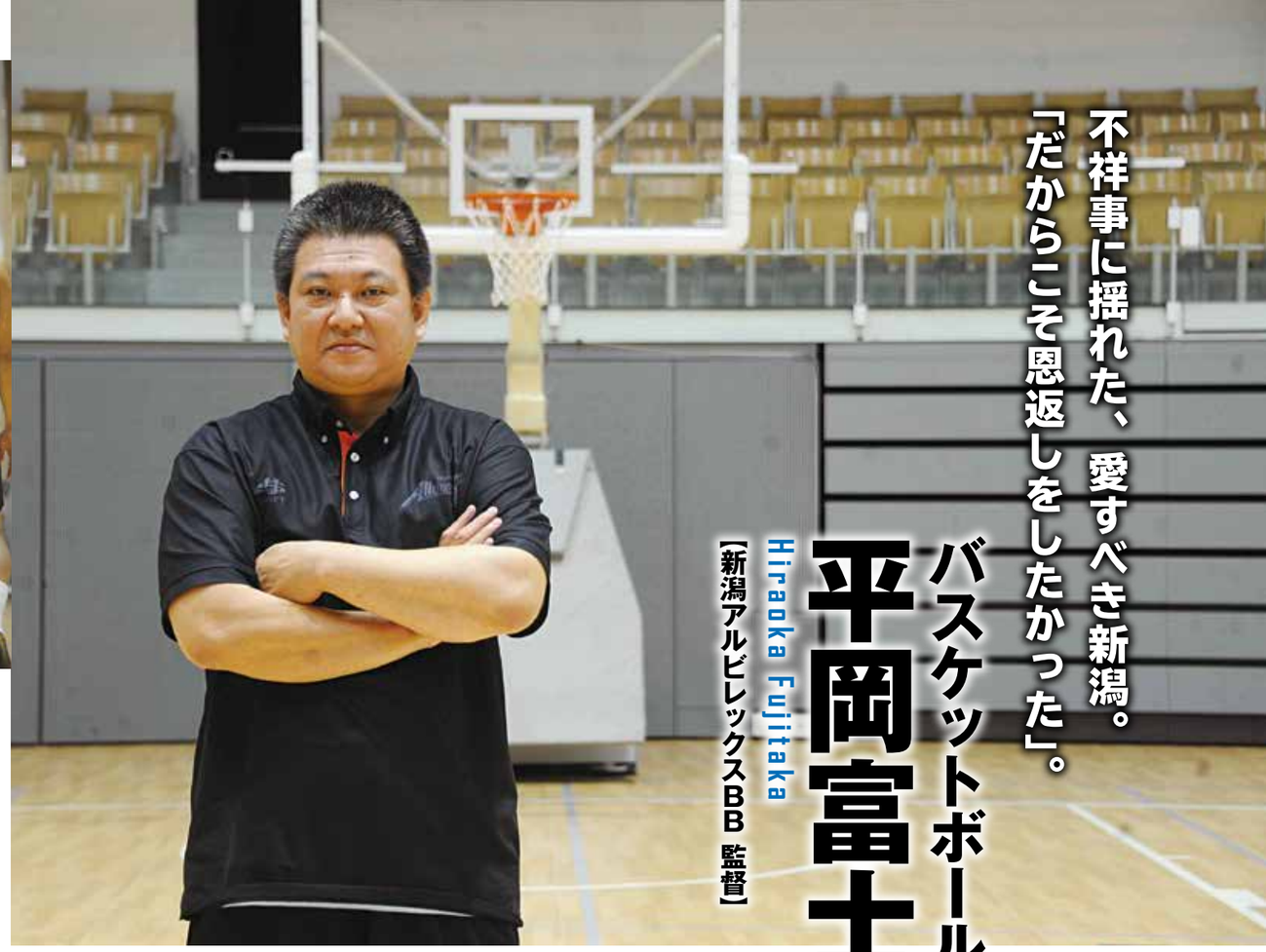
ただ、代表入りを逃したことは悔しかった。「世界で自分がどこまで戦えるかを感じたかったのだけど…」。過去にも世界で戦う場に立てなかった経験があった。2019年、U16日本代表に選出され、ニュージーランドへの強化遠征に参加した。そのときのニュージーランド代表戦で23得点。初めて海外に行き、外国人選手とも初対戦だった。当たりの強さ、ドライブのスピード。持ち味が通用した。当然、自信になった。だが、そのメンバーで臨むはずだった昨年のU16アジア選手権は新型コロナウイルスの影響で中止になった。その先にあるU17ワールドカップもなくなった。

U16日本代表は幻に終わった。U19日本代表には選ばれなかった。「今回は本当に落ち込みました。母校の上島（正光）コーチやラビッツの大滝（和男）監督から『Wリーグがある。まずそこで頑張れ』と励まされて、気持ちを切り替えることができました」。

年代別代表での腕試しの機会がなくなり、その反動で一足飛びに日本代表入りにかける思いが強くなった。高校の2学年先輩の東藤とは普段から仲が良い。五輪後、連絡を取り五輪の感想を聞いたという。『緊張したし、大会まですごく大変だった。代表の練習はセットプレーが多くて覚えるのが大変。毎晩寝る時間が遅くなるくらい必死に覚えた。できることは全部やろうと頑張った』――心に響いた東藤の声。憧れの先輩も緊張と不安でいっぱいだった。それに押しつぶされまいと努力していた。

「できることを一生懸命やる」。今やるべきはラビッツの主力として結果と内容を残すこと。それが揺るぎない自信になることは分かっている。「五輪で金メダルを取る」という大目標をぶれずに持ち続けながら、Wリーグで実力アップを図る。

「持ち味を伸ばしてチームに貢献する」。ラビッツでの練習も常に全力だ



不祥事に揺れた、愛すべき新潟。「だからこそ恩返しをしたかった」。

バスケットボール 平岡富士貴

Hiraoka Fujitaka

【新潟アルビレックスBB 監督】

2021-2022年のBリーグが開幕した。今季、B1新潟アルビレックスBBの監督を務めるのはOBの平岡富士貴。昨季、群馬クレインサンダーズでB1昇格を果たした実績を手土産に、bjリーグ時代の14-15年以来、7季ぶりに指揮を執る。昨季首脳陣の不祥事に揺れ、低迷した古巣の再建に乗り出す胸の内には、新潟への純粋な思い入れがある。

撮影・文◉斎藤慎一郎（日刊スポーツ新聞社）

「何か話したいことはあるかな？」。新潟アルビレックスBBの練習終了時、平岡は円陣の中で選手に意見を求める。その日の練習の反省、気付いたプレー、感じていること。選手が気持ちの奥にあるものを発信できる機会を日常的に設けている。今季の主将の岡本飛竜、経験豊富な新戦力のジェフ・エアーズ、副主将のベテラン佐藤公威、同じく副主将の大矢孝太朗。チームのリーダー格は促される前に口を開く。その影響もあり、選手間の会話は多い。練習前後、メニューの合間。自然と集まりプレーのチェックやアドバイスをし合う。

「自分たちで考えて何かやるというのはいいことですよ。僕が立ち入る場ではない」。大切にしているのは自主性。一方、練習自体は厳しい。メニューのほぼ全てが走力を必要とする内容。5対5の試合形式を1時間近く続けることも多い。足を止めるとコーチ陣から声が飛ぶ、球際で戦わないと繰り返し指摘される。練習後、疲労感を口にする選手がほとんどだ。「きついですよ、今季の練習は」。佐藤は苦笑いする。続けて言った。「練習からバスケが楽しい。すごく充実している」。

6月に監督就任が発表され、7月中旬にチームが始動した。そこから10月2日の開幕までの3カ月ほどで、平岡はチームの雰囲気を作った。「選手には自由にプレーさせています。その中で勝つために自分には何を求められているのか気付いてほしい」。特長に合わせて役割分担するのがセオリー。そうではなく、やりたいことと必要なことを選手自身に判断させる。「誰もやっていない手法で、勝つチームにしたい」。新潟で、それができると感じた。

目指すのは攻守の切り替えの速いバスケ。妥協は許さない

「僕の性格上、もともとできている良い物には飛び付きたくないんです」。14－15年以来の新潟の監督就任を決断する時、そこがベースになった。群馬クレインサンダーズとも契約更新の話はあった。Bリーグ記録の33連勝、最高勝率9割1分2厘（52勝5敗）のB2最強チームを率いてB1に挑む魅力も感じていた。シーズン後、新潟からオファーが来た。B1東地区9位、チーム史上最低勝率の2割9分6厘、前社長による前監督へのパワハラ問題の発覚、主力選手の流出。20－21年シーズンを終え、新潟は満身創痍だった。

現状の改革、今後のチーム作り、クラブの取り組み――。新潟側とはさまざまなことを話し合った。「勝つためにはどうすればいいでしょうか。今の新潟には平岡さんが必要です」。その問いに答えた。「勝つのはタイミングです」。いい選手をそろえても負けるときがある。それほどの力量でなくても勝つときもある。チームとフロント、ファンの熱量が一緒に同じ方を向くことも大切。ただ、いつ来るか分からないタイミングをつかむための準備に手を抜いてはならない。「僕が行っても、勝てるかどうかは分からない。それでも良ければ前向きに考えます」。新潟は受け入れた。そのときに腹は決まった。

どこにいても新潟のことは気になっていた。クラブ創設の2000年に日本リーグ2部・愛知機械工業から移籍してきた。当時の広瀬昌也監督に司令塔としての基本、選手としての心構えをたたき込まれた。引退後は広瀬の下でアシスタントコーチを務め、その後13－14年から2季監督に。2季目にはbjリーグ時代の新潟の最多勝利数タイになる36勝をマークした。

「新潟という環境がバスケだけでなく人間としても成長させてくれた」。新潟市にジュニアを対象にしたクラブチーム「BOMBERS」を立ち上げ、次世代の育成にも乗り出した。生まれは茨城だが、「僕は新潟県人」と言うのが自然になった。

「昨季、新潟ではいろいろなことがあった。良い意味ではない注目を浴びてしまった。そういうチームを自分だったらどれだけのレベルに持っていけるか、チャレンジがしたかった。何より、こういうときだからこそ恩返しをしなければ」。群馬では地区優勝を含めて3回優勝を経験した。群馬、新潟以外のチームからも打診はあった。好条件も提示された。「お金かやりがいか。やりがいを取りました」と笑う。周囲から見れば火中の栗を拾うとも思える決断も、自身にとっては自然の流れだった。

だからこそ、思い切って自分が追い求めるチームを作る。妥協はしない。「ここで失敗したら監督として次はないでしょう。集大成のつもり」。退路は断った。それでも悲壮感はない。「目標はチャンピオンシップ。行けないことはないと思っています。勝っても負けても接戦ができる」。気負いのない笑顔の奥に自信を潜ませた。

profile 平岡富士貴（ひらおか・ふじたか）◉1974（昭和49）年4月26日生まれ、茨城県出身。土浦日大高から日本大学へ。97年大学4年時にU22日本代表に選出される。97年に日本リーグ2部・愛知機械工業に入社。2000年に新潟に移籍。04-05年シーズン終了後に現役を引退した翌シーズンから12-13年まで新潟のアシスタントコーチ、13-14年シーズンから2季連続で新潟の監督を務めた。15年につくばロボッツ（現B1茨城ロボッツ）の監督の後、群馬の監督に。20-21年シーズンB2優勝。

チーム再建の切り札としての重圧も励みに変えて臨む